

黒海で見た日食：＜豪華客船の旅＞

杉並区立科学教育センター： 伊東 昌市

それは2年前の夏に送られてきた一通の案内状から始まった。差出人はテッド・ペダス氏。国際プラネタリウム協会（IPS）で面識があり、かなり以前からクルーズで日食を観測するツアーを企画している人物である。

ヨーロッパを横断する1999年の皆既日食は、かねがね是非見たいと思っていた。見るならばエキゾチックなトルコがいいとも考えていたのである。けれどもペダス氏の資料を見ているうちに、無性に心惹かれるものを感じたのである。97年中に申し込みれば25%の割引があるというのも魅力であった。

実は95年頃にひょんなことから日本を代表する豪華客船「飛鳥」28000トンに乗船する機会があった。三泊四日のクルーズ体験は船旅に対する私のイメージを180度変えてしまったといっている。翌年には1万トン弱とひとまわり小さな「オセアニア・グレース」に乗船する機会にも恵まれた。

それまでは学生時代に経験した伊豆七島を航行する、あの嘔吐の臭いに蒸せかえる臭いの中で毛布にくるまっていた思い出や、荒海をヨットで航海した楽しくも苦しい思い出しかなかったのである。

「飛鳥」や「オセアニア・グレース」は、海に在ることを忘れさせるような別天地であった。まぎれもなく海の上であり、海のすばらしさを満喫させてくれる全く次元の異なる世界といっている。ラウンジでは毎日エンターテイメントやフォーマルに身を包んだパーティーが開かれている。講演会やカルチャー・スクールのプログラムも目白押しに組まれているのだ。

白波の立つ世界に冠たる冬の太平洋を航海していても、殆ど揺れを感じさせることはない。都会の一流ホテル以上のサービスが常時提供され、エレベーターも完備している。荷物は自宅からの宅急便で船室の中まで運ばれるので、一切手にする必要がない。車椅子で何処へでも行ける。賢沢過ぎるのは確かだが、障害を持つ人や老年寄りには理想的な旅といっているかも知れない。……値段を別にすれば。

そんな折りの、日食クルーズへの誘いであった。さらに2カテゴリーのアップグレード・サービスもあるという。つまり、25%引きの料金でさらにエコノミー券でビジネス・クラスに乗れるようなものである。計算すると合計で30%もの割引ということになる。案内文を持つ僕の手は感動で震えていた。（……でもないか）

これに申し込まないのは「犯罪だ」。これが僕の結論だった。夏休み中、会う人毎に、誘ってみた。「ねえねえ、豪華客船で日食見に行かない？エーゲ海クルーズだ

よ。黒海へ出て日食みるんだよ。雲の無いところへ自由に動けるから晴れる確率が高いよ。イスタンブールも行くんだよ。オデッサやヤルタなどウクライナにも行くよ。なかなか行けないところだよ。まるでアルゴ船の旅だよ。ギリシャも観光できるよ。船っていいよ……」後から分かったことだが、実際にこのコースは普段からギリシャ神話のアルゴ船の冒険をもじった「ゴールデン・フリース（金羊毛）の旅」という愛称で売り出しているらしい。

しかし、反応はイマイチであった。「いい写真が撮れないじゃない。船酔いはやだなー。高いじゃない。」「だいいょーぶだよ。中身を考えれば信じられないくらい安いんだよ！」そんな会話がなかった。

秋になり、ともかく申し込み準備をしておかなければならない。改めて参加者をつつると三四十人の仲間が集まった。年末には一人600ドルを集め41人分の預託金を、ニューヨークのロイヤル・オリンピック・クルーズ社に送った。1ドル130円という最悪の為替レートであった。乗り込む船の名は「ステラ・ソラリス」号。名前がいい。日本語に訳せば「星陽丸」とでもいおうか、縁起のよさそうな名前である。

98年暮れから99年春の最終払い込みに近づくにつれて参加できない人がぼつぼつと現れた。我々50歳前後の者にとっての1年半の間には家族や会社の環境には大きな変化が待っているのがある。当然と云えば当然であろう。

それでも何とか代わりに参加者を紹介してもらったりしながら、最終的に39人の参加者が確定したのは出発2カ月を切った6月半ばであった。船以外の往復の飛行機や観光のチケットは一年以上前からJTBに依頼してあった。しかし、値段の折り合いがつかず、マップ・インターナショナルにお願いすることになった。何せ、一人当たりの見積額が10万円も違ったのだが、結果的には非常に満足している。中身には殆ど差がなかったと思う。

7泊8日のクルーズのみで他の観光は一切やらないグループとクルーズの後、一週間のギリシャ観光を加えたグループの二つに分けた。前者は総日数が10日、後者は15日である。それぞれ11人と28人となった。参加者の年齢は6歳から75歳と広い範囲にわたっている。

春から出発前にかけては船室カテゴリーの移動やそれに伴う料金の変更、乗船手続きに伴う連絡など頻りにメールのやりとりを行った。インターネットの便利さをいやというほど味わった。E-mailは恐らく50通ほどにも達したのだろうか。お陰で日本人船員や日本語の解る現地ガイドも手配してもらえた。

今回の日食はあまりまじめな観測を考えないことにした。ビデオやカメラのファインダーを見ているうちに日食が終わってしまった……ということだけは避けたかった。「本物をしっかり見る」といことを目標にしたのである。参加者の殆どがそうであった。私を含め1973年に理科大隊に参加したメンバーも多い。あのときは5分も皆既時間があったのだが、殆どカメラや観測機材に行動が支配されてしまっていた。ましてや今回は2分しかない。

コロナを肉眼で詳しく見たいという欲望がある。私は3月に笠井トレーディングに分割搬送が可能な口径32cmのドブソニアン望遠鏡「Ninja」を発注してあった。かなり危険だがプロミネンスやストリーマーの微細構造を観望したいと考えたからである。夜の観望会も面白そうである。

NASAの情報では8月の黒海の波の高さはせいぜい50cm程度という。殆ど揺れないと考えていい。低倍率で見るドブソニアンなら船上観望が可能なのである。同じ船「ステラ・ソラリス」に講師として乗り込むアテネのプラネタリアム館長デニス・シモポウロス氏に問い合わせたところ「全く問題ない。私にも見せてくれ。」との返事がきている。ドブソニアンが完成して送られてきたのが出発2日前の8月3日であった。思ったより美しい仕上がりである。

8月5日我々は機上の人となった。早帰りグループはエール・フランスでパリ経由、ゆっくりグループはシンガポール航空でシンガポール経由である。成田では、パリ経由でルーマニアに向かう国立天文台の谷川さんとばったり出くわした。お互いに晴れることを祈る。

シンガポールでは乗り換え時間の間に航空会社が用意してくれた観光ツアーに参加、主な名所を見学する。夜の運河クルーズはなかなかの趣向である。

翌日の早朝、アテネ到着。早速バスに乗りパルテノンの神殿から昇る太陽を見る。国会と衛兵の交代、活気ある市場を見て回り10時半ごろには船が出港するピレウス港に到着。乗船手続きに並ぶ。

乗船口でジュースのサービスを受け、歓迎の演奏の中を乗船。ルーム・キーを買って、船室に落ち着く。我々のメンバーは、最上等のスイートAからスイートB、スイートCそしてデラックス・ツインのTA及びファミリー用の部屋が与えられている。殆どが浴槽付きのアップパー・クラスである。

「ステラ・ソラリス」号は最大乗客数700人弱、船員330人のフォー・スター（4つ星）クラスの客船である。全長166mで18000トンである。このくらいの大きさになるとうねりもまたいでしまうので、まず揺れることはない。乗客の殆どはアメリカ人の客で、シカゴのアドラー

プラネタリアムは館長のナッペンバーガー博士以下200人を越える団体を組んでいるという。ロスアンゼルスグリフィス天文台クラブ博士も50~60人の団体が参加したそうである。エドウィン・クラブ氏はスカイ・アンド・テレスコープにも連載を持つ天文民族学や考古学の大家であり、今回の日食観測のコマンダーでもある。これらの著名人は毎日開催される数々の講演会の講師も努めることになっている。他にもマサチューセッツ工科大学(MIT)、ダートマス大学などのグループも加わっている。日本人は我々の他に一組のご夫妻と、女性船員1名、合計42名で、アメリカ人に次ぐ人数であった。

「ステラ・ソラリス」は予定どおり午後一時に出港した。まず、非難訓練が実施される。非常放送が流され、救命具を着て自分の救命ボートの前に集合するのである。それを船長以下パーサー達が確認して歩く。僕の救命ボートには、先にも紹介したアテネのユージニデス財団のプラネタリアム館長デニスと一緒にいた。彼はヨーロッパ・地中海プラネタリアム協議会のIPS（国際プラネタリアム協会）担当の代表であり同じく日本プラネタリアム協会（JPS）のIPS担当を務める僕とは度々会っている。ステラソラリスの船長も顔見知りらしく船長がねんごろに挨拶していた。廊下でこれもIPSの評議員をやっているオレゴンのジョン・エルバートと出くわした。「ヨ！」と挨拶する。

最上階の甲板に出る。目の前にはエーゲ海ブルーの海が広がっている。白波が立っている。向かい風が強い。身体が押し戻されるほどだし、マストやアンテナから風の音が響いてくる。船は一路エーゲ海を北上し、ダルダネス海峡、マルマラ海、そしてボスポラス海峡にあるイスタンブールをめざした。

訪問地はトルコのイスタンブール、ブルガリアのネッセル、ウクライナのオデッサとヤルタである。港、港にはツアー用のバスが待機していることになっている。

最初の寄港地イスタンブールに入港する。エキゾチックな雰囲気期待で胸が膨らむ。一番楽しみにしていた場所だ。クルーズ会社の手配で日本語ガイドや通訳の協力で観光名所を回る。トプカプ宮殿ではスルタンの宝物やモハメッドの足跡や髭を見たが……え！本物かな？と、ショーウィンドウを覗き込んで歩く。トルコ絨毯を見るとき女性の眼差しは真剣そのものであった。

ネッセルは接岸できないので、救命ボートをテングーとして使った。黒海沿岸の古い町は古代ギリシャや古代ローマの植民都市であった所も多い。そんな町を見て歩く。船の中での夜の衣装は每晚指定コードが決められている。この日の晩はフォーマルである。男性はタキシードかダーク・スーツ、女性はイブニング・ドレスを着なければならぬ。僕も着慣れぬタキシードを着た。

やはりタキシードに身をつつんだ船長がパーティー会場の入り口に立ち、一人一人握手して出迎えてくれる。シャンパンやカクテルなどが用意される。たまには気取るのも面白い。

オデッサの港の正面にはあの名画戦艦ポチョムキンにも出てくる虐殺の階段「ポチョムキンの階段」がある。フランス風の街並みを見て、午後はオペラ・ハウスでバレエを見る。ステラソラリス乗船客のための特別プログラムが上演された。ショパンの音楽に合わせた古典バレエと歌劇カルメンのハイライトをモダンバレエにアレンジしたものである。特に後者の出し物はそのきびきびしたカルメンの踊りに圧倒された。棧敷にあるロイヤル・ボックスで王侯貴族の気分を味わわせてもらう。

ヤルタの見所は勿論、ルーズベルト、チャーチル、スターリンによるヤルタ会談が行われた宮殿や、地域の司政官が避暑に使った宮殿などを見て歩く。暑い。大ジョッキー杯1ドルの生ビールの味と安さに感動する。何せミネラルウォーター（輸入品だが）一本が4ドルもするのだ。黒海でひと泳ぎする。埠頭を一旦先に接岸していた客船「ピスタ・フィヨルド」が出港していった。ファイブスター・プラスという最高ランクに評価され、世界で最も美しい船の一隻として知られている。なんとも乗ってみたい船である。

翌11日、いよいよ日食の日がやってきた。黒海は皿である。360度雲一つ見あたらない。縮緬じわの海を観測ポイントに向けて静かに移動している。ドブソニアン望遠鏡のNinjaを組立て、甲板に運ぶ。プール・デッキとトップ・デッキには観測場所を確保しようと人々が集まり始めている。デッキのスペースは十分であり心配しなくて済みそうである。GPSを使って何回も現在地を確認する。

行く手にはいつのまにか船が4隻ほど集まっている。双眼鏡で確認すると我々の船と同じマーク、つまりロイヤル・オリンピック・クルーズ社のワールド・ルネッサンス他3隻と冒険クルーズでうっているマルコポーロである。この船には スカイ・アンド・テレスコープが企画したツアー乗客が乗り込み、大勢のアメリカの友人達が参加していたことを後で知った。排水量2万トンのマルコポーロは元ソビエトの船で砕氷能力が高くハリポートまであるそうだ。

ステラソラリスは屋上が開け広い甲板となっている。煙突の煙を避けて一階下のプール後部にある甲板で観測しようという人たちが多し。600人を越える乗客は思い思いの場所を決め、皆既にのぞむ。比較的ゆったりとした場所を選ぶことができた。

いよいよ太陽が欠け始めた。けれどもあまり緊張感はない。まじめな観測をしようとかすごい写真を撮ろうと

いう人が殆ど居ないようだ。何よりも楽しもうとする人々ばかりである。日食メガネだけを持っている人たちも多い。時刻と食分率を告げるコマンダーであるクラブ氏の声がスピーカーから響いてくる。「第二接触まであと・・・分」、薄暗くなりはじめた黒海に消えて行く。

太陽はいよいよ細くなってきた。あたりが暗い。金星が見えている。人々が興奮し始める。やがて、皆既となる。直前からコロナが見え始めるとあちこちから歓声や悲鳴があがる。その音は響くこともなく無限に広がる鏡のような海の上に消えていく。遙か遠くに見える他の船舶でも同じ歓声があがっているはずなのだが、何も聞こえてこない。我々の船だけの孤立した世界がある。回り中見渡す限り陸の見えない地平線付近がほんのり橙色に色づいて薄明かりになっている。

急いで双眼鏡を取り出して太陽を覗く。この日のために手に入れておいたツイスの6×42ダハである。僕の宝物だ。

極大期コロナはまさにひまわりのように広がっている。複雑に入り組んだストリーマーが無数に見えている。黒く丸い月の周りは輝くピースのようにプロミネンスが囲んでいる。確かに美しい。以前にも見たはずなのに、こんなにも美しいものかと改めて驚く。周囲の歓声の中に自分の歓声、いや歓喜の悲鳴が混じってゆく。

三脚に載せたビデオをセットし撮影ボタンを押すと、今度は急いでNinjaに飛びつき、はやる心を抑えながら太陽に照準を合わせる。間違いなくこの船で最大の望遠鏡である。いや、ひょっとすると僕は今回の日食を観察している世界中の観測者の中で最大口径の望遠鏡で肉眼観察しているのかも知れない。

焦点距離40mmの広視野アイピースに目を移す。「・・・」息を飲むとはこのことだ。黒い太陽の周りには強烈に輝く無数の筋が入り乱れている。何と表現したらよいのだろうか。その強烈な光はまるで「キーン」と金属音を発しているような錯覚を覚える。太陽表面のあちらこちらから生じている数え切れないほどのストリーマーが複雑に交差している。沢山の活動領域があるのだろうか、周縁のあちらこちらにはまるでタマネギの皮のようなドーム構造が形成されている。以前とこかで見たことがある。確か五稜光学の大型映像フィルム「黒い太陽」である。マウナケア山頂でNHKハイビジョン望遠カメラで撮影したコロナの映像とオーバーラップする。あのときは曇り空で悔しい思いをしたことを思い出す。

急いでビデオ・カメラのところへ戻る。ファインダーを覗き、視野を修正する。皆既中は振動を抑えるため、船のエンジンは最小限に抑えられている。けれども潮に流されるのだろうか、ほんの僅かだが船が少しずつ方位を変えていくからである。

再び望遠鏡へもどり、太陽の周縁に沿って望遠鏡を動

かす。誰か側にいる仲間に見せてあげたいと思ったがどれもいなかった。もっとも望遠鏡での観望については誰もさそってはいない。40名近くもいるメンバーに声をかければたった2分の間に全員が見るのは無理だと思ったからである。また、並んだりすれば、そのために各自で見る機会を失ってしまいかねないと危惧したのだ。不公平も起こるに違いない。だいいち危険極まりない。…そう考え、それぞれ自分で考えた方法で日食観測（観察）をしてもらうことにしてあった。

それにしても、本当は誰か他の人にも見てほしかった。済まないと思いながら望遠鏡を占領する。視野を移動させていくと様々なプロミネンスが入ってくる。何と中空に浮かぶプロミネンスがある。そこから滴のように太陽表面に向かってガス？が延びている。プロミネンスによって微妙に明るさが違っている。中空プロミネンスの左下の視野に見えるプロミネンスは眩しいほどに明るく強烈なピンク色に輝いている。ストウリーマーはまるで圧力のかかった白い紙が微妙な陰影を示すようにカーブを描きながら外に向かって延び、薄くなり、やがて太陽系空間に向かって消えて行く。そう、その様子はまるで運動会や学芸会の飾りに使う花飾りにも似ている。けれども遥かに複雑だ。そういえば確か、東北大学の斎藤先生が「バレリーナのスカート」と表現されたが、まさにそれである。だが赤道付近に限られているわけではない。だから花飾りに近いのだ。

やがて、太陽の一方のリムが明るくなってきた。急いで視野をはずし、望遠鏡での観察を終える。口径32cmでは、まともに太陽を見れば瞬時に失明してしまう。ダイヤモン・ドリングとて油断ができない。

たった4、50倍ではあるが、日食観察としては明るく高倍率での観察がこんなにも刺激的だとは思ってもよらなかった。しばし呆然とする。やがて、拍手が起こる。みんな満足したのだ。英語が飛び交い、お互いの印象を語り合っている。第三接触を過ぎたとはいえまだ暗い。青黒い空に細い太陽とその近くに金星が輝いている。内合近く金星をこんなにも高い空で見ることができるのは日食ならではといえよう。

みんなを呼び集め、望遠鏡でコロナを見せてあげられなかった僕に、金星を見て貰うことにした。ファインダーから主鏡のアイピースに目を移すとそこには黒い空にキラキラと白く輝く鎌のような細いヴィーナスの姿が見えている。普段見慣れたシンチレーションに揺れる内合前後のそれではない。ぴたりと動かない。研ぎ上げたばかりの鋭敏な鎌を見るようである。その美しさに感嘆の声を上げたアメリカ人もいた。

ところが、メンバーでもある年輩のご婦人に見て貰ったのだが、視野には太陽が入っていて金星が無いという。不審に思いながら代わりに覗いてみる。…ん！…間

違いなく真ん中に金星が見えている。…？。

サングラスを通して眺める欠けた太陽と同じものが見え、金星ではなく太陽と思いこんだのだった。大笑いしてしまった。

お盆にシャンペンが次がれた沢山のグラスを載せ、甲板を歩き回っているボーイさんたちがいる。「しまった！」急いで、シャンペンを買いにいのがみんな空のグラスである。船上の人々は全員とっくに飲んでしまったらしく、何処へいってもシャンペンは空になっていた。これが楽しみであったはずなのに…最大の不覚であった。

空はどんどん明るくなり、金星は青空に溶けていってしまった。今見たばかりの皆既日食なのに、昔のような気がしてくる。コロナの記憶がどんどん薄れてゆく。これまた…しまった揮発性メモリーに入れてしまった。凄かったという印象だけが残る。…それでいいのだ。

皆既日食にはもうドブソニアン望遠鏡が手放せなくなるだろう。こんどは5分位見ていたい。

夜は再び衣服コードがフォーマルであった。タキシードやカクテル・ドレスに身をつつんだ紳士淑女たちが、夕食にのぞむ。アコーディオン、ヴァイオリンを演奏しながら楽員たちがテーブルを回る。仲間のテーブルがにぎやかになっている。テーブルにはケーキが置かれ、楽員がひときは華やかに演奏している。特別なシャンペンが抜かれプレゼントまで運ばれている。皆既日食を見た今日は我々杉並区立科学教育センターから参加した浜村さんの誕生日なのである。大勢の人々から祝福を受ける。クルーズでは乗船客の記念日を予め調査し、みんなでお祝いしてくれるのである。

暗くなった窓の外には、宝石のような夜景が流れてゆく。幅たった数百メートルのボスポラス海峡に入った。ここにはかつてシュムブレガンデスく青い環岩、ぶつかり合う岩>があったという。アルゴ船の難所であった。今、両側を流れていく美しい夜景は東洋と西洋の接点イスタンブールの街である。そして航路を塞いだ岩に代わって東西を結ぶ橋がかかっている。勿論この時はやがて起こる大地震のことは想像さえもできなかった。

翌朝、かつてトロイのあったヒッサルクの丘を遠くに望むダルダネス海峡を静かに進んで行く。この海にギリシャ軍が集結したという。3000年前のことという。…つわものどもが夢の後…である。

夕刻ミコノス島に上陸し島内のレストランで夕食をとり、島を後にする。夜半過ぎはペルセウス座流星群を見ようと思うが、身体がついてゆかない。上部甲板に上り、とりわけ大出現はないことを確かめるとベッドに倒れ込み、翌朝ピレウス港入港で目を覚ます。7泊8日のクルーズが無事に終了したことを知る。

下船手続きを終え、早帰り組と分かれる。残った28人は、バスでアポロンの神託で有名なデルフィー遺跡へ向かう。夜にはアテネへ戻り、国立考古学博物館では念願のアンティキシラのメカニズムと対面する。ガイドも知らないこの機械は、紀元前80年ごろ製作された最古の天文計算機、そしてプラネタリウムの元祖なのである。

翌日飛行機でクレタ島へ渡り、クノッソス神殿を見て宿泊。そしてゼウスが生まれ育ったと伝えられるディクティ洞窟見学、さらにエーゲ海の浜辺で泳いだりしてアテネに戻る。スニオン岬のポセイドン神殿で日の入りを見る。夕日を受け神殿が朱色に染まる。荘厳な一時である。

毎晩のことだが、夕食はエーゲ海料理というのが豊富な魚貝類に舌鼓を打つ。日本人にあうのだ。そしてビー

ルやワインが旨い。ギリシャ・ワインは安くて味がいい。

その翌朝トルコ地震を知る。我々はバスで南下、コリントスの遺跡、ミケーネの遺跡を訪ねアテネに戻った。こうしてアテネ3泊クレタ島1泊の計4泊5日の旅を終え帰国したときは8月19日となっていた。

8月5日に出発し、全てに恵まれ、あっと言う間の15日間であった。途中何人か病人も出、40度の熱で4日間も寝込んだメンバーもいたが、船は便利である。ちゃんと目的地まで運んでくれるし、心配した医者が何回も往診してくれた。

帰国しても、幸いにも僕の机はまだあった。

それにしても、職場に復帰して一週間というものは浦島太郎のような心地であった。

時差の影響があったのは勿論だが……。